

2022年9月

課題本 『火花』

又吉直樹/著 文藝春秋 2015年

9月の読書会から

『火花』を読んで語り合いました。

作者は、お笑い芸人又吉直樹氏で、2015年上期の芥川賞受賞作品です。芥川賞受賞作品では、歴代発行部数第2位だそうです。

「火花が印象的に使われている作品」「なぜタイトルは、『花火』ではなく『火花』なのか」「人を笑わせることに神経をそそぐ登場人物について」「作品中の表現の是非」…などさまざまな意見が出て盛り上がりました。これこそ読書会の面白さであり、愉しさだと思います。

課題本が好き、苦手、読みやすい、読みにくいなどいろいろな思いをもちながら、それぞれが持ち寄った感想を共有し、語らうことができる時間を大切にしていきたいです。

(文責:世話係)

読書会を終えて

——名付けて“「あほんだら」神谷氏伝記前編”——

講師 吉川五百枝

漫才師「あほんだら」の神谷の言行が浮き彫りにされますが、それは瞬間の輝きと華やかさ、美しさを持つ火花の連続発火を見るようでした。その発火を壮大にしたものが「花火」なのかなと思います。

何度か見たことのある花火大会。何発も連続する豪華な色の輝きに、無声の声援を送った花火大会を見物した後、見上げる夜空は、煙がたなびく中に、静かな星の光だけが残って居て、興奮の余韻が消えるのを追いかけるように哀しさがひたひたと空気を塗り替えてきます。

この『火花』もまた、読了して思い返すと、自分を裏切る事無く発火し、その美しいと思うものをひたすら追い続ける姿を讃えつつ、哀しさの残る本でした。

20歳の僕(スパークスの徳永)と24歳の神谷のであい。それから10年間、芸能界で発火し続けた二つの火花でありました。

全編を貫いているのは、僕の描き込んだ神谷像です。僕の一語一語が、師匠として見つめる神谷への距離感として現れます。僕は、この小説の語り手であり主人公ではありますが、神谷に近づき離れ、近づき離れ、その距離を描くことによって、この小説を成立させました。

神谷については、多くのページ数が使われています。風貌は、〈痩身だが眼光が鋭く、迂闊に踏み込ませない風格〉と説明され、その風格の中に流れているのは〈無防備な純真

さ。漫才師として生業を成り立たせている話術は〈よどみなく流れるようなしゃべり〉〈周囲とうまく関係を築くのが不得手で、周辺の重力を一人でうけおったような重い空気を身に纏った男〉〈狡猾さから無縁〉〈おもねる器量はあるが選択しない〉〈一切ぶれずに自分のスタイルを全うしている〉その漫才は、〈誰もが知っている言葉を用いて想像も付かないような破壊を実践する〉〈漫才のおもしろさを追求する為なら臆面も無く自分の欲望をさらせる〉。

それは漫才師を目指す僕には(美点)と映っています。彼を師匠と呼んで、自分を測る基準の物差しにしていました。そのまま素描のような神谷像をびっしりと書き込みながら、小説は、次第に「伝記」的なものから「評伝」的な趣へと、移っていきました。

神谷に対して僕はいかなる存在か。

僕は、〈純真さを憧憬と嫉妬とわずかな侮蔑が入り交じった感情で、神谷のそれらを恐れながらあいする)のです。神谷に師匠として敬愛の気持を持ちながら、それだけではなく、揺れ幅の大きい冷めた目も持っていました。〈僕は凄まじく面倒なやつだと認識されていた。〉

僕のような「めんどろなやつ」は、つべこべ言い、色々視点や表現を変えて、自分の顔を話の場にのぞかせるものです。次第に、主人公らしくなりました。

〈僕は永遠に誰にもおもねることのできない人間。芸人にとって変態的であることが一つの利点であると思い違いをしていた。それに違いは無いが僕は不器用なだけ、その不器用を売り物にもできない単なる不器用〉

神谷の光の当て方に惹かれて、神谷の言葉で伝記的に始めたものの、僕のことを考えると、見えるものが少し違ってきました。

「必然性なんか要らん」といい、究極のおもしろい会話を求めて、欲望に対してまっすぐ全力で生きることを主張する神谷の猥褻性に付いて行けない僕。神谷のおもしろさの選択の途中で猥褻な現象があっただけで、アウトローをおもしろいとは思って居ないという神谷の、ある意味での真剣さを僕は理解しているのです。理解しながらも、僕は、不純物の混ざらない純正のおもしろさを求めました。師匠とは異なる道を見てしまった。にもかかわらず、なお、神谷のすがすがしさに敵わないと思う僕の線の複雑さ。この不安定な振幅の大きさに「私」の中に共鳴するものがあります。

二人のやりとりを読んでいる「私」の心の底に残る哀しさ。

これは何だろうかと思いました。

神谷のすがすがしいほどの自己への忠実さ。その神谷の行きついた先に、我が身を巨乳にするという工夫が示された時、「私」の哀しさの正体を見た気がしました。

“自分だけにとって”おもしろいことの追求になってしまった。究極の巨乳は、おもしろさを“共有”できる世界ではないのです。作者が、巨乳を究極の語彙に選んだのには驚きましたが、神谷らしくもあります。神谷のおもしろさの追求は、“自分が思う”という視点が依りどころなのです。

神谷は、けっしていいかげんに生きてきたわけではないのです。僕が神谷を師匠と思ったように、右顧左眄しません。それでも「私」が哀しいと思うのは、神谷には、“共に”という世界が見えないのです。何かを一緒にするという“共に”ではなく、「みんな共に同じ凡夫なのだね」(共是凡夫)の“共に”です。「凡夫」は格差などありません。そこに優しいまなざしが生まれると思うのに。

神谷にも、先輩、後輩の関係もちゃんとありましたし、「あほんだら」の相方もありました。転がり込んでも入れてくれる女の人もありました。それでも、彼の追求の視点に、“共に”という世界を見つける事ができないのです。求めていったおもしろさの到達点が巨乳。他との競い合いになってしまう芸能界を、ステージ上だけではなく、生き方の全てにしてしまった哀しさを感じました。

〈芸人にはみんな自分のおもしろいと思うことがある。でもそれを伝えなあかん〉と言う僕の世界に、“共に”という展開が入って来たと感じます。聞いている人を傷つけるのは、おもしろいとは伝わらない。〈神谷に、悪気が無いのはわかってます。〉と思いやりながら、〈人に優しくくないのは、おもしろくないことと同義なんです〉と断じる僕がいます。〈神谷を全力で否定しなければならぬ。それが僕の道なのだ〉と気付く僕に、どこかで頷く「私」がいます。

ただ一つの火花は、その人だけのもの。それも美しい。火花が複雑に組み合わせられて夜空に輝く大きな花火。それも美しい。

「求道」それ自身の美しさと、人間が「求道」を持つ哀しさを読みました。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 Y T 】

人と人がぶつかりあうことで何かが変わる。師匠と弟子の関係の中で色々な感情が生まれ、変化していく様子が描かれていました。

『火花』を読んで

◆【 佐村蘭子 】

この本を手にとった時は、お笑い芸人又吉直樹さんの小説。という「お笑い芸人」が先行して私の興味、関心をそそった小説でした。そうすると、自伝的な話で面白おかしく書いているのかと思ってしまいました。読み始めると、文章が単調で起伏がなく面白味がないように感じられました。お笑い芸人さんなんだからお笑いのもとになるものが書かれているに違いないと考え、読み進めていきました。すると、物語に登場する神谷さんと徳永さんの描写の行間の中に又吉さんの思いや生き方が入っているような気がして読み進めていきました。

特に、P32の神谷の言葉の中に「一つだけ基準をもって何かを測ろうとすると眼がくらんでしまうねん。例えば、共感至上主義の奴達って気持ち悪いやん？共感って確かに心地いいねんけど、共感の部分が一番目立つもので飛び抜けて面白いものって皆無やもん。阿保でもわかる依存しやすい強い感覚ではあるんやけど、創作に携わる人間はどこかで卒業せなあかんやろ。他のもの一切見えんようになるからな。これは、自分に対する戒めなんやねんけどな。」

この文章をもとに二人の関係性を追って読み進めていくと、相反する考えや行動を示しながらも、二人とも自分の火花(自信・不安)を散らしながら生き方を追及しているように読み取れました。又吉さんの表現力は素晴らしいです。

◆【 T 】

漫才がやりたいとお笑いの世界に飛び込んだ徳永が、神谷と出会ったのは彼が20歳、神谷が24歳の時だった。自分の考える【面白い】を体現している神谷をみて、神谷を師匠と呼び、神谷とともに濃厚な10年間を過ごした。その間、面白いとはどういうことか、笑いとは何かを追求してきた。

どんな仕事でも、初めはなかなか思い通りにいかないことが多いし、壁にぶち当たりくじけることもある。ましてや、マニュアルもないし聴衆により反応も異なるお笑いの世界で生き抜いていくことはとても大変な事だろうと思う。

「子供も大人も神様も笑わさなあかん。」

「漫才とは二人で究極の面白い会話をするものであるという根本に立ち戻らせてくれる。」

「面白いかどうか以外の尺度はない。」

そう思い、笑いを追求してきたが、なかなか認められないし生活も苦しく、不安や焦燥に駆られたであろう。

しかし、この10年は徳永にとってかけがえのない10年でもあった。ひたすらにお笑いを追求し、悩み苦しんだ10年であったが、大きな喜び・感動を味わった10年でもあった。

「自分の考えたことで誰かが笑う喜びを経験してほしい。」

「この長い月日かけた無謀な挑戦によって、僕は自分の人生を得たのだと思う。」

素晴らしい経験をし、悔いのない10年だったのだと分かる。

題名の『火花』は、徳永のコンビ名のスパークスでもあり、誰かと誰かの出会い、そこに起こる化学反応を火花とよんだのではないか？

心理学者のユングが、【二つの人格の出会い、二つの化学物質の接触のようなものだ。もし何らかの反応が起きれば、両方が変質するのだ。】と言っているが、私たちは、大きな火花、小さな火花を発しながら周りの人たちと関わり合っているのではないか。

徳永と相方山下との出会いにも火花を發したであろうし、神谷と出会った花火大会でも二人の間には火花を發したであろう。お互いに影響を与え合い、変容し合い、成長し合ったのではないだろうか。

◆【 N2 】

熱海の花火に始まり、熱海の花火で終わる。この作品は受賞した直後に読んでいるのだが、その時はきっと深く読んでいなかったのだろう。再読すると、又吉直樹35歳の作品で彼の溢れる才能と、知識と、考え方を表しているせいかとても難しく理解し難かった。お笑い芸人の世界でいろいろなことが起こるのだが、全編は静かに進んでいる。見上げる雄大で華やかな花火の下で、必死の芸人が言葉のぶつかり合いで火花を散らし、客の笑いを取ろうとしている。天上の華やかな花火と地上の必死の火花の似ているようだが全く違う、二物衝撃を感じる。

神谷と徳永の会話は徳永が師匠を立てるように、一步引いて火花を散らしながらの面白い会話が全編を貫いている。相方に腹を立てた徳永を神谷が鍋のネタで落ち着かせる下り

に神谷の優しさを感じるのだが、神谷は生活の全て、会話の全てが漫才なのは面白いのだが読んでみるとゲップが出てきそうになる。結果の不確かな漫才師としての長い月日を掛けた無謀な挑戦によって、結果徳永は自分の人生を得たのだと思うと書いている。この一文は人生に挑戦をしてこなかった私の胸に刺さるのだが、誰でも、何でもそれ自身では気づかないうちに常に何かと接触し火花を散らし、変化、成長しているのではないだろうか。漫才を卒業した徳永は師匠の神谷さんから離れ次の人生を歩み始めた。かつて関わった全ての人たちが徳永を漫才師にしてくれたのだと思う。これは神谷へのオマージュなのだろうが、最後に神谷が自身の身体に手を入れて今後どうしようかと後悔する部分の創作は必要だったのだろうか。漫才師の明るい笑いを取るための影の努力を欠くのであったら他のエピソードにしても良かったのではないだろうか、ここまでさせるのは残酷ではないだろうか。作者が LGBTQ に対する意見を述べるために書いたのだろうか。これが又吉直樹作品の素晴らし所と言われればそうなのだろうか。

◆ 【 K子 】

今月の課題本「火花」は7年前の芥川賞受賞作です。

読書会でまず、芥川賞・直木賞について話題になりました。本作品が芥川賞「え～」と言う声と「マアマア」許可するが半々ぐらいでした。私はヒット作品と思っています。(今でも…)

初読の時は作品の仕掛けに気づきませんでした。構成として最初に熱海で花火の夜に出会います。神谷(27歳・漫才師 師匠と思う人)。主人公徳永(20歳・漫才師志望)

それから10年間2人の濃い人生の絆が培われていきます。

神谷はあほんだらを実践して生きていく破天荒いや異端いや異常いや究極の破戒的な世界の人です。神谷の才能(?)を受け入れられる徳永、漫才をしていくうえで彼の感性に恐れを抱きながらもつき合っていく。徳永でもどこか師匠としてついていながらも距離感はあるのです。

最後の場面も熱海の「花火」です。ここに登場する神谷は芸人として究極の「あほんだら」となっているのです。ここまではるか？涙さえ誘います。

作者は彼が豊胸手術をして風呂で胸を揺らしている姿で幕を引いているのです。

「火花」も「花火」も明るさの後にくる暗さ＝私達が生きていく上でのものではないでしょうか。

読後感

文章表現が魅力的、言葉に垢がついていないのでは…

余談

・又吉直樹＝火花としてマスコミ登場。多くの人が「花火」という。

その度に彼は「火花」と言い直す。(これも何か…?)

・歴代の芥川賞の中で売上額最高だそうです。作者の顔がすぐ結びつき、芸人の受賞作でしたからですかネ！

・「太陽の季節」で石原慎太郎さんが受賞したので「俺が芥川賞というものを世に認知させた」と毒を吐いたそうです。

◆【 MM 】

数ある芥川賞受賞作品のなかでもっとも売れた本。売れすぎると食指が動かなくて「いま読まなくてもいいか…」と遠ざけたままだった。今回初めて読んだ。

序盤は「ちょっとのことをたくさん言葉で飾り立てて読みにくい！長たらしい…」と思った。こういう文体が芥川賞をとった理由のひとつなのか。芥川賞の対象ジャンルは純文学（「芸術性」や「形式」が重んじられた文学作品）だそうだ。作者の又吉直樹は面白くて好きなので以前からエッセイを読んだり動画は時々見ていた。そこから感じていた又吉氏の印象は「考えすぎ」「練りに練り上げる」「そして考えすぎて突拍子もなくなり笑えてしまう」。芥川賞は狙ったつもりはないと言っていたがこれはきっと意識して考えに考えてこんな表現になったのでは…と思った。

『火花』はお笑い芸人である作者だからこそ書けた作品だと思う。師匠と呼ぶ神谷と自分のお笑いに対するスタンスの違い、才能の違いを感じながらも師匠の模倣ではなく自分のやり方で笑いに向き合う徳永。徳永は師匠との圧倒的な差を感じながらも人を笑わせることを

極めようともがいていく。フィクションではあるがお笑い芸人の考えや起きた事柄の一部は実体験では？と思わせ読ませるのがうまい。

作品の中で私が好きだった表現は誹謗中傷に対する神谷の言葉だ。「人を傷つける行為って一瞬は溜飲が下がる。でもそこに安住している間は自分の状況はいいように変化することはない。その間、ずっと自分が成長する機会を失い続けてると思う。（誹謗中傷している）あいつら、被害者やで。おれな、あれ、ゆっくりな自殺に見えるねん」

SNSで揚げ足をとったりわざとかさそうでないのか勝手な解釈から人を責めたりすることをよく見る。そのたびにもやもやしていた。そこに反論するほどの熱量は私は持たないけれど、目に入ってしまおうと「なんだかなあ」と思うことが多かった。そんな私に「あー納得！」と思わせてくれた言葉だった。ああいうよくわからない人たちは「ゆっくりな自殺」に自らを導いているのか…気づかずにねえ。うんうん。もやもやが少し晴れた。

もう一つ好きな表現があった。作者が言いたかったことはこれだったらいいなあと思う気持ちもある。最後の「生きている限り、バッドエンドはない。僕たちはまだ途中だ。」売れないまま芸人を続ける師匠の神谷、少しテレビには出ることもあったが解散を選んだ徳永。徳永は引退はするけどお笑いはやめないだろう。世間を笑わせることはなくても身近な人を笑顔にしていこう。私の好きな「いろいろなことがあったが最後は希望を感じさせる作品」だった。

読書会では課題本を楽しめた人、そうでなかった人などいろんな意見が出て今月もとても興味深い時間があった。いつも思うのが自分と反対の意見を持っている人の話を聞くのが楽しい。「そういう考えがあるのか～面白い」と思う。課題本を楽しめなかった月は読書会に参加してどういう切り口で読んだら楽しめるのかのヒントをもらう。見かたを変えると読める本になるのが不思議だ。これだからやめられないのよね～と思います！